

教員養成課程の大学生のアイデンティティ発達

—教育実習期間を挟んだ4時点データに基づく量的・質的検討—

○岩佐康弘^{1,2}・日原尚吾³・杉村和美³

(¹ 広島大学大学院教育学研究科・² 日本学術振興会特別研究員・³ 広島大学大学院人間社会科学研究科)

研究の目的

新任教員は、就職直後に、生き方に迷いを抱き、精神的健康を悪化させやすい。職場適応に繋がる心理的基盤を学生段階で培うことは、喫緊の課題である(文部科学省, 2015)。確固たる生き方の自覚であるアイデンティティは、職場適応に繋がるため(Luyckx et al., 2010)、教職を目指す学生のアイデンティティの発達過程を解明することは重要である。学生に教師としてのキャリアや技量を確認させながら、今後の生き方を考えさせる教育実習は、アイデンティティ発達の契機となることが想定されるが(Verhoeven et al., 2018)、その過程は未検討であった。本研究は、教育実習期間に、学生が教職キャリアに不安を抱きつつ、教師としての技量への省察をする中で、どのようにアイデンティティを発達させているのかについて、4時点の縦断データから量的・質的に検討する。

方法

対象者と手続き 教員養成課程の大学3年生152名に、教育実習を挟んだ4時点(教育実習8週間前, 1週間前, 1週間後, 8週間後)で質問紙調査を実施した。また、質問紙調査の参加者のうち32名に、4時点目終了後に面接調査を実施した。

質問内容 質問紙調査では、①アイデンティティ発達(多次元アイデンティティ発達尺度; 中間他, 2015; $\alpha = .68-.81$)と②教職キャリアへの不安と教師の技量への省察(教職を目指す過程での再考尺度; 岩佐他, 2019; $\alpha = .78-.89$)について尋ねた。面接調査では、生き方の明確さや探索に関わる教育実習での体験と、その体験を教職志望者としてどのように認識したのか、について尋ねた。

倫理的配慮 学生に対して、研究目的、調査への協力は自由意思であること、データは研究のみに使用することを、書面と口頭で説明し、同意書への署名をしてもらった上で回答を求めた。

結果

量的分析 潜在クラス成長分析を行い、Nagin(2005)の基準から、①達成(A)、②モラトリアム(M)、③拡散(D)、④拡散からモラトリアム(D to M)のアイデンティティ発達軌跡を抽出した。

各軌跡における、教職キャリアへの不安と教師の技量への省察の切片と1次・2次の傾きを潜在成長曲線モデルによって推定した。適合度は良好であった(CFI = .983-.999; SRMR = .031-.036)。

教職キャリアへの不安と教師の技量への省察の切片・傾きが、軌跡間で異なるかどうか検討した。不安に関して、①Aが③D及び④D to Mより低い得点を示した。④D to Mは、③Dより、不安の得点を大きく減少させていた。省察に関して、①A及び④D to Mが③Dより高い得点を示した。

質的分析 面接データからテーマを帰納的に生成し、そのテーマをアイデンティティ発達理論に基づいて演繹的に再解釈する、テーマティック・アナリシス法を行った(土屋, 2016)。①Aや②Mは、教育実習を、【教職を目指すかを見極める重要な体験(テーマ1)】、【教師としての技量の課題把握に繋がる体験(テーマ2)】として肯定的に認識していた。③Dは、教育実習を、【教職を目指すことへの不安に繋がる体験(テーマ3)】、【教師としての技量の自信喪失に繋がる体験(テーマ4)】として、否定的に認識していた。④D to Mは、教育実習での体験を、【テーマ3】や【テーマ4】として否定的に認識するのみならず、【テーマ1】や【テーマ2】として、肯定的にも認識していた。

考察

本研究は、教育実習を契機とした、学生の多様なアイデンティティ発達を、量的・質的検討により、詳細に明らかにした。これにより、知見が乏しい、教職を目指す学生のアイデンティティ発達研究を拡張した。また、教育実習での体験を、自身の課題の把握や教職を目指すかを見極める契機として肯定的に認識することで、①Aや④D to Mのように、アイデンティティが発達的に進展することが示唆された。また、そのような学生は、教職キャリアへの不安が低く、教師の技量への省察をしており、キャリア形成の面でも進展していた。これらより、教職を目指す学生のアイデンティティ発達を支えるためには、教育実習での体験に対して今後の生き方の自覚に繋げられる“捉え直し”を、学生に促す必要性が示唆された。